内部地区の環境へ取組む各種団体

内部川の環境保全活動

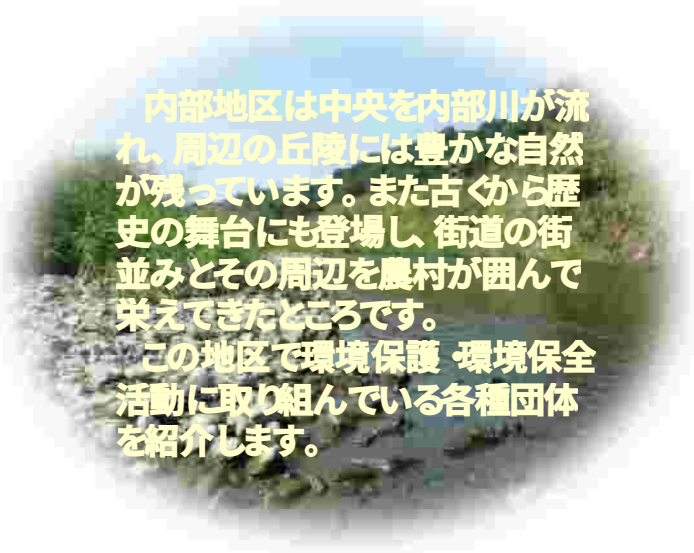
内部地区社会福祉協議会）

内部川清掃

内部川清掃は、当初地域の青少年野外活動団体「内部みどりの少年隊」が行っていましたが、20年前に内部地区社会福祉協議会が引き継いで地域の行事として取組み、毎年千人を超す住民が参加する大きな環境行事となっています。
毎年継続されているこの取り組みにより住民の意識も高まり、収集されるゴミの量も激減しています。発案した当時の子どもの中には、父親・母親となり親子で参加する人もいます。郷土の環境を守り育てるこの取り組みが親から子へ受け継がれています。昨年からは有害外来生物に指定されているオオアレチウリの駆除も取り入れています。
こうした活動に対し三重県から平成19年度の「みえ環境活動賞」を受賞しました。

内部川探検

この催しは内部地区社会福祉協議会が主催して小学生を対象に内部川探検の名称で行われている「内部川水性生物の生息調査」です。
親子で一緒に水遊びの気分で生き物を採取して名前と数を記録し、生物の種類と生息数から川の汚れを判定することで、身近な水辺の環境に関心を持ってもらおうと平成14年から行われています。
調査は、道具を四日市市環境学習センターから借用して専門の先生方の指導のもとに行われ、毎回70名前後の参加者が集まる人気の行事となっています。



内部地区は中央を内部川が流れ、周辺の丘陵には豊かな自然が残っています。また古くから歴史の舞台にも登場し、街道の街並みとその周辺を農村が囲んで栄えてきたところです。
この地区で環境保護・環境保全活動に取り組んでいる各種団体を紹介します。

環境調和型農業を目指す

農事組合法人 キタコマツファームの取組

キタコマツファームは北小松地区土地改良区が中心となって、組合員の農業生産の協業を図ることにより生産性を向上させ利益増進を図ることを目的として平成１８年に農事組合法人として設立されました。
平成１９年からは、農水省が進める「農地・水・農村環境保全向上対策」（農業資源の保全と質の向上、化学肥料や農薬の大幅低減など環境にやさしい先進的な営農活動を目指す活動)に応じ、中心となって活動組織「緑豊かな北小松を守る会」を立ち上げ、町ぐるみで先進的な農業基盤作りに取り組んでいます。
水稲では稲わら、麦わら、大豆の「残さ」を全て農地に戻す資源循環型の有機栽培に取組み、７０%減化学肥料と５０%減化学合成農薬の特別栽培米を生産、「みえの安心食材」の認定を受けています。昔ながらの方式でつくる「3世代米つくり」や農道の草刈り、排水路補修は非農業者も含めた会員全員が参加する行事となっています。
今後は、地元の安心食材を加工（おにぎり、餅、あられ、味噌）し、安全安心の地産地消を進めると同時に、食育を通じ子供たちに食の安全環境を守る大切さを学ばせる活動も計画されています。

大豆残さの鋤き込み

三世代米つくりでの田植え風景

里山の環境保全活動

采女城跡の里山保全

采女城跡保存会

采女城跡は内部川と足見川が合流する内部川左岸の泊丘陵南端にあり、城跡は標高50～70メートルの複雑な丘陵地形の尾根筋を利用してつくられ、その規模の大きいこと、遺構の保存状態がよいことで県下に一千余りある城跡の中でも第一級の戦国時代の山城であるといわれています。
ここは昭和30年代までは地元の里山として利用されてきましたが、高度成長とともに人手が入らなくなり放置されていました。平成14年に有志により采女城跡保存会が結成され、月1回の定例作業を積み重ね笹や下草刈、散策道の整備など行ってきた結果、今では往時の里山の姿に戻っています。
現在は地元の幼稚園や小学校の総合学習・環境教育の場として利用され、また多くの人が散策に訪れるようになっています。

内部小4年生の総合学習での歴史のお話

トンボと竹炭のビオトープ

ネイチャークラブ内部

このビオトープは貝家町原後（かいげまちはらご）の面積約２,０００㎡の元休耕田を整備してつくられています。
地元のボランティア団体「ネイチャークラブ内部」が中心となり平成18年に計画が立てられ、地権者や地元自治会との調整には地域の町づくりを押し進める市民センターが協力し、四日市市の市民緑地制度を利用する形で進められました。平成19年１月から「ネイチャークラブ内部」の人たちの手でトンボ池の造成や排水路などの整備作業が進められ、平成19年８月に開所式が行われました。
その後中部電力から寄贈された苗木の植樹大会や、竹炭つくりなど、ビオトープとその周辺の整備を通して環境への理解を深める催しが行われ、たくさんの親子連れが参加しています。

トンボ池で遊ぶ子供たち

環境未来塾

2007年市民センターの事業として行われた講座「環境未来塾」から新しい二つの環境保護活動が生まれました。
これらはCTYの市政報道番組「ちゃんねるよっかいち」でも取り上げられました。

生ごみの堆肥化

エコかわせみ

平成19年度の環境未来塾で大垣順子氏（環境カウンセラー・コンポストマイスター肥料化技術指導員）から紹介のあったプラスチックの衣装缶を用いた「生ごみの処理のやり方と堆肥つくり」について、関心を持った人たちが平成19年の11月にグループ「エコかわせみ」を結成し一歩を踏み出しました。この名前は内部川でみられるカワセミにちなんでいます
「理論だけに終わらせず実際にやってみよう」「一人ではできないけれど仲間で取り組めばできるかもしれない」という思いで挑戦、自然相手の堆肥つくりだけに時間がかかりましたが15名のグループの力で軌道に乗せました。
平成20年度の環境未来塾では会の代表者鈴木さんによって活動状況と生ごみ堆肥の作り方について講演が行われました。

一次処理の終わった生ごみはみんなのものを集めて2次処理します

天ぷら油を回収して地元の野菜を

内部地区市民センターが19年度に実施した「環境未来塾」のなかで受講者からでた提案を基に市民センターが事業者と協働で構築したユニークなシステムです。
利用者は廃天ぷら油を内部地区内に三重県古紙センターが設置したリサイクルステーションに持ち込みます。重量を計量してポイントをカードに記録、たまったポイントはすぐ近くのJA内部で地元産のお米や野菜を購入に利用できます。
このシステムで平成20年3月からスタートし4月から11月までの7ヵ月に2,200kgの天ぷら油が回収されました。現在は新聞・雑誌も含めて運用され、多くの人が利用しています。
回収された天ぷら油は軽油に再生されバイオ燃料として使用されています。